

社会科学系の大学生を対象にした英語学習に対する意識調査

カレイラ松崎順子

Abstract

This study assessed social science students' motivations for learning English, English lessons they want to get, and the current methods of studying English using text mining. This study adopted open-ended questions. Data from the open-ended questions were inputted and analyzed using software: Text Mining Studio Ver. 5. Word frequency analysis, dependency frequency analysis, characteristic word extraction, and characteristic dependency extraction were conducted. Participants were 108 first-year students majoring in social sciences in a private university in Tokyo. They were divided into three groups according to their TOEIC scores.

Results revealed that many participating students learned English because they think that English is necessary to obtain employment in a globalized society. Students in the lower TOEIC group tend to study English without a set goal. Those in the middle TOEIC group tend to study English because they want to communicate in English. Students in the higher TOEIC group tend to study English while considering globalization and job-hunting. Results show that most students want to take lessons to enhance English communication skills. Students in the higher TOEIC group generally want to take TOEIC preparation lessons.

Keywords: Text mining, Motivation, Needs

1. はじめに

近年日本の大学において相次ぐ学習指導要領の改正によるゆとり教育のもと、履修科目数や授業時間数の減少、大学入試の多様化、少子化と相次ぐ大学・学部等の新增設に伴う高等教育の大衆化等（甲田，2011）の原因により基礎学力が不足している学習者が大学に増えてきた。大学の英語の授業においても中高等学校レベルの英文法が身につけていない学生が増

えており、そのような学生を対象にどのような英語の授業を行えばいいかを探るため、今まで多くの動機づけ研究 (e.g., 田中, 2009; 長, 2009) やニーズ分析 (e.g., カレイラ, 2009; 清水・松原, 2005; 吉重, 2005) が行われてきたが、それらのほとんどが選択式の質問紙調査を行ったものであり、質問項目で問われたものを中心に分析しているため、質問項目で問われていないことについては明らかにすることができない。よって本稿では英語力があまり高くない学生の内面をより詳しく探り出すため、彼らの英語学習に対する動機づけ、ニーズ、および現在の英語の学習方法について自由記述式の設問により調べてみることにした。さらに詳しく調べるために、英語力によりどのように異なるのかも明らかにすることにした。

2. 日本の大学生を対象にした英語学習に対する意識調査

日本の大学生を対象にした英語学習に対する意識調査は多く行われてきた。それらのほとんどは選択式の質問項目による調査で、たとえば、英語学習に対するニーズ分析では早坂 (1995) が身につけたい英語の能力、英語を学ぶ理由について調べ、多くの学生が海外において様々な日常的状況に対処できるような英語の能力を身につけ、英語で自分自身の考えや感情について話せるようになりたいと思っていることを報告している。また、Kikuchi (2005) は学生および教員を対象に調査を行った結果、学生は英文和訳が最も効果的な学習方法であると思っているが、教員はあまり効果的であるとは考えていないなど、学生と教員との間に英語学習に対する認識に違いがあることを指摘している。また、吉重 (2005) は工学部、水産学部、医学部の学生を対象に質問紙調査を行った結果、どの学部においても学生の多くが英語の「話す力」と「聞く力」が必要であると感じており、さらに、専門教育を受ける上で英語が必要であると認め、英語の専門用語の学習を望んでいたと報告している。中野 (2005) は工学部の学生を対象に調査を行い、多くの学生が「話す力」を最も伸ばしたいと思っており、8割近くの学生が専門英語の必要性を認識していたと述べている。また、清水・松原 (2007) は経済学部の卒業生に対して調査を行い、卒業後職場で必要とする英語力は「読む力」であることを明らかにしている。カレイラ (2009) は保育士養成課程の学生を対象に調査を行った結果、多くの学生が海外に行ったときに困らない英語力を身につけたいと思っており、また、映画やテレビ番組などを使った授業や読解やリスニングのコツを教えてくださいの授業を受講したいと思っていることを明らかにしている。

また、英語学習に対する動機づけに関しては、田中 (2009) が大学の英語の授業において外国ドラマと外国映画を用いたコミュニケーション活動を行った教育的介入を行い、プレ測定、中間測定、およびポスト測定によって動機づけの変動を調べた結果、教育的介入によって授業活動レベルの動機づけと英語授業への動機づけが高まったことを示している。さらに、田中・廣森 (2007) はグループによるプレゼンテーション活動を大学の英語の授業の中に取り

り入れることにより、学習者の内発的動機づけが有意に高まったことを報告している。

3. 研究の方法

3.1 リサーチ・クエスチョン

上述したように大学生を対象にした英語学習に対する意識調査は選択式の質問項目による調査が多い。よって、本研究では選択式の質問項目に表れていない彼らの英語学習に対する意識や実態をより詳しく探るため、自由記述式の質問紙調査を社会科学系の大学生に行うことにした。なお、以下のようなリサーチ・クエスチョンを設定した。

1. 社会科学系の大学生の英語を学習する理由にはどのようなものがあるであろうか。さらにそれらは英語の熟達度別によりどのように異なるであろうか。
2. 社会科学系の大学生の受講したい英語の授業はどのようなものであろうか。さらにそれらは英語の熟達度別によりどのように異なるであろうか。
3. 社会科学系の大学生は英語をどのように学習しているのであろうか。さらにそれらは英語の熟達度別によりどのように異なるであろうか。

3.2 調査協力者

調査協力者は、東京都内の私立大学の社会科学系の学部に所属する1年生の108名である。彼らのTOEICの平均点は334.07点（最低点25点，最高点845点）であった。なお、本研究ではTOEICの得点により、彼らを3つのグループに分けた。

- ・TOEIC 上グループ（370点以上）：32名
- ・TOEIC 中グループ（300点～369点）：40名
- ・TOEIC 下グループ（299点以下）：36名

3.3 質問項目

調査協力者には同意書を得たうえで以下のような3つの自由記述式の質問項目の調査を行った。

1. なぜ英語を学習すべきであると考えますか。
2. 大学ではどのような英語教育を受けたいですか。
3. 英語ができるようになるためにどのような学習をしていますか。

3.4 分析方法

本研究ではText Mining Studio 5.1を使用してテキストマイニングの分析を行った。テキストマイニングとは「形態素解析という、単語の活用を考慮しつつ最小の意味単位に分割す

る段階（分かち書き）と、形態素から大きなクロス表に書かれた数字を処理する段階（解析）の2段階のメカニズムからなっている」（贄・三宅，2014，p.22）。Text Mining Studio5.1はテキストに付随する属性を活かした様々な分析ができ、その結果をグラフィカルな表示で表現することができる。本研究では単語や係り受けの出現回数をカウントする単語頻度解析と係り受け頻度解析を行った。さらに、出現頻度が多くなく上位に現れていない重要な単語や係り受けを見落とす可能性もあるため、補完類似度（2.50以上を表示）を用いてTOEIC上位・中位・下位グループのそれぞれの特徴語と特徴表現を抽出した。

4. 分析結果および考察

4.1 英語を学習する理由

図1は英語を学習する理由の単語頻度解析の結果である。最も多い単語は「必要」であり、その他、「社会」「グローバル化」「海外」「就職」などが上位に来ている。これらのことから、本研究に参加した学生はグローバル化社会において英語が必要であり、就職などにおいても英語が必要であると感じているために英語を学習していることがわかる。図2は「英語を学習する理由」の係り受け頻度解析の結果である。最も多い単語は順に1位「英語—必要」、2位「必要—思う」、3位「社会—出る」、4位「グローバル化—進む」、5位「英語—使う」、6位「社会—必要」であった。これらのことから本研究に参加した多くの学生は英語が必要であると感じているために英語を学習しているといえるであろう。特に、3位「社会—出る」と6位「社会—必要」などのように、社会に出たときに英語が必要であると感じており、また、4位「グローバル化—進む」にみられるように、グローバル化ということを意識して、英語を学習すべきだと考えている学生が多いことがわかる。

次にこれらを英語の熟達度別に各グループの単語頻度解析と係り受け頻度解析を行い、さらに、各グループの特徴語と特徴表現を抽出した。表1および表2は各グループの「英語を学習する理由」の単語頻度および係り受け頻度の結果であり、表3および表4は各グループの「英語を学習する理由」の特徴語および特徴表現である。

「TOEIC下グループ」では単語頻度解析（表1を参照）、係り受け頻度解析（表2を参照）、特徴語（表3を参照）、および特徴表現（表4を参照）においてどれも「社会」「必要」「社会—出る」「必要—思う」などが上位に来ている。ゆえに、「TOEIC下グループ」では社会に出たときのことを考えて英語を学習しているということが特徴としてあげられるであろう。

一方、「TOEIC中グループ」では単語頻度解析および係り受け頻度解析において他のグループと同様に「英語」「社会」「必要」「英語—必要」などが上位に来ているが（表1および表2を参照）、一方で、特徴語・特徴表現分析では「英語」「コミュニケーション」「話す

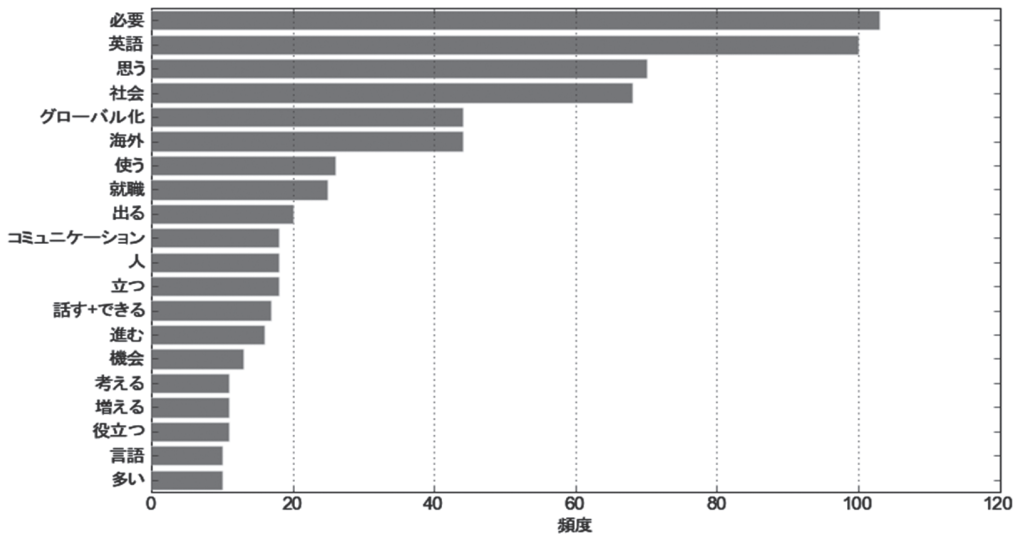


図1 「英語を学習する理由」の単語頻度

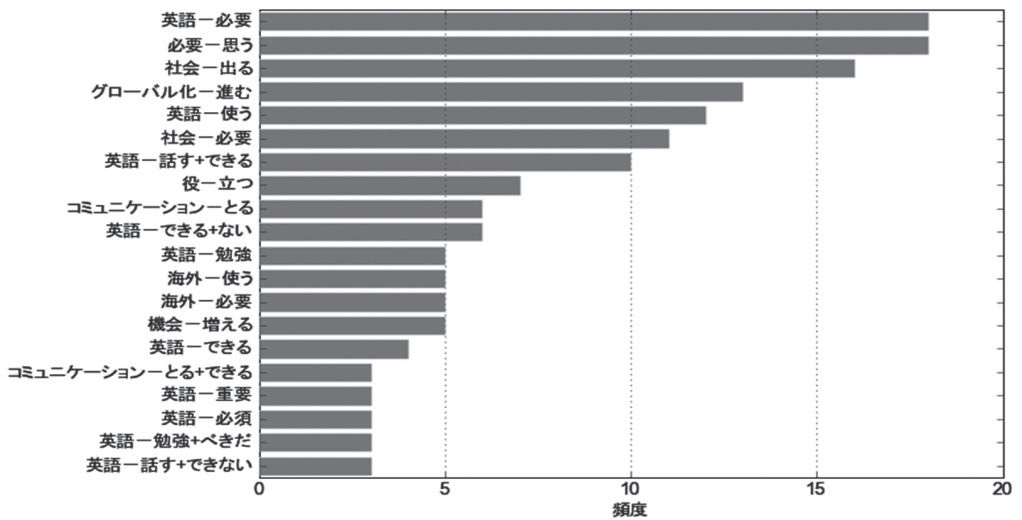


図2 「英語を学習する理由」の係り受け頻度

社会科学系の大学生を対象にした英語学習に対する意識調査

表 1 各グループの「英語を学習する理由」の単語頻度

TOEIC 低	頻度	TOEIC 中	頻度	TOEIC 高	頻度
必要	42	英語	57	必要	19
社会	30	必要	42	英語	15
英語	28	思う	35	思う	11
思う	24	社会	28	社会	10
グローバル化	13	使う	15	グローバル化	6
使う	10	グローバル化	13	就職	6
就職	10	コミュニケーション	12	進む	4
出る	10	人	11	海外	3
立つ	8	話す+できる	11	言語	3
海外	7	世界	10	国際社会	3
増える	7	立つ	10	人	3
役立つ	7	仕事	9	日本	3
機会	6	就職	9	勉強+したい	3
グローバル	5	出る	9	スキル	2
コミュニケーション	5	グローバル社会	7	外国	2
わかる+ない	5	進む	7	学ぶ	2
仕事	5	できる+ない	6	企業	2
進む	5	とる	6	求める	2
世界	5	会社	6	広がる	2
話す+できる	5	海外	6	広げる	2

+できる」「できる+ない」「英語—できる」「コミュニケーション—とる」（表3および表4を参照）が上位を占めている。ゆえに、「TOEIC 中グループ」は英語でコミュニケーションがとれるようになりたいために英語を学習しているという傾向がみられるといえるであろう。

さらに、「TOEIC 上グループ」では特徴語および特徴表現として「勉強+したい」「必要」「就職」「日本」「国際社会」「世界的」「選択肢—広がる」「英語—必要」（表3および表4を参照）などが上位に来ており、国際化する日本において英語が必要であると感じており、特に、就職などにおいて必要であるために英語を学習したいと思っている学生が多いということがわかる。「TOEIC 下グループ」が漠然と社会に出て役立つからと回答しているのと比較して、「TOEIC 上グループ」は就職・選択肢・国際社会などより具体的なことを述べており、英語を学習することにより将来の選択肢が広がると考えて英語を学習している学生が多いと推測できる。

以上のことから RQ1「社会科学系の大学生の英語を学習する理由にはどのようなものがあるであろうか。さらにそれらは英語の熟達度別によりどのように異なるであろうか」に関

表2 各グループの「英語を学習する理由」の係り受け頻度

TOEIC 下	頻度	TOEIC 中	頻度	TOEIC 上	頻度
社会一出る	10	英語一必要	9	英語一必要	4
必要一思う	7	英語一使う	8	必要一思う	3
英語一必要	5	必要一思う	8	グローバル化一進む	2
社会一必要	5	グローバル化一進む	6	社会一必要	2
グローバル化一進む	4	英語一話す+できる	6	選択肢一広がる	2
役一立つ	4	社会一出る	6	グローバル化一はかる	1
英語一使う	3	コミュニケーション一とる	5	グローバル化一進行	1
英語一話す+できる	3	英語一できる+ない	5	グローバル化一伴う	1
機会一増える	3	英語一できる	4	グローバル社会一進む	1
コミュニケーション一とる+できる	2	社会一必要	4	スキル一勉強	1
仕事一必要	2	英語一必須	3	スポーツ一コーチ	1
職業一就く	2	英語一勉強	3	チャンス一逃す	1
世界一使う	2	仕事一必要	3	とらえる一変わる	1

して検討していくと、本研究に参加した社会科学系の学生は総じてグローバル化した社会において英語が就職などに必要であると感じているために英語を学習しているといえるであろう。一方、英語の熟達度別に比較してみると「TOEIC 下グループ」は漠然と必要であると思うから英語を学習する傾向がみられ、「TOEIC 中グループ」になると英語でコミュニケーションがとれるようになりたいために英語を学習している学生が増え、さらに、「TOEIC 上グループ」では就職ということを意識して英語を学習する傾向がみられるといえるであろう。

4.2 受講したい英語の授業

図3は「受講したい英語の授業」の単語頻度解析の結果である。「英語」「授業」「教育」などの一般的な語彙を抜かすと「英会話」「会話」「コミュニケーション」などの単語が最も多く頻出されていることがわかる。図4は「受講したい英語の授業」の係り受け頻度解析の結果である。「英語一学ぶ+したい」「教育一出る+したい」「授業一出る+したい」を抜かすと上記の単語頻度解析の結果と同様に「英語一話す」「英語一話す+できる」「英語一会話」「役一立つ」「社会一出る」が多く頻出されていることから、本研究に参加した学生は概して社会に出て役立つ英会話などのコミュニケーション能力を高める授業を受けたいと思っていることがわかる。

次にこれらを英語の熟達度別に各グループの単語頻度解析と係り受け頻度解析を行い、さらに、各グループの特徴語と特徴表現を抽出した。表5および表6は各グループの単語頻度解析および係り受け頻度解析の結果であり、表7および表8は各グループの受講したい英語

社会科学系の大学生を対象にした英語学習に対する意識調査

表3 各グループの「英語を学習する理由」の特徴語と指標値

TOEIC 低	指標値	TOEIC 中	指標値	TOEIC 高	指標値
社会	12.31	英語	17.77	勉強+したい	6.77
必要	11.46	コミュニケーション	6.68	必要	5.62
出る	6.82	話す+できる	5.64	就職	5.11
増える	6.48	できる+ない	5.27	日本	4.99
役立つ	6.48	とる	5.27	国際社会	4.55
わかる+ない	5.26	できる	5.19	世界的	4.51
思う+ない	4.05	使う	4.98	旅行	4.51
グローバル	3.78	人	4.68	スキル	4.07
グローバル化	3.46	世界	4.61	進む	3.70
立つ	3.38	会社	4.3	言語	3.66
職業	3.31	する	4.15	学ぶ	3.18
役	3.17	世界共通語	4.15	選択肢	3.18
機会	2.91	必須	4.15	必要不可欠	3.18
海外	2.77	仕事	3.57	無い	3.18
する+したい	2.70	場面	3.19	使う+できる	2.74
簡単	2.70				
就く	2.70				
必修	2.70				

表4 各グループの「英語を学習する理由」の特徴表現と指標値

TOEIC 低	指標値	TOEIC 中	指標値	TOEIC 高	指標値
社会—出る	10.45	英語—できる	3.87	選択肢—広がる	4.09
役—立つ	3.77	コミュニケーション—とる	3.80	英語—必要	2.89
社会—必要	3.17	英語—できる+ない	3.80		
機会—増える	3.00	英語—使う	3.60		
職業—就く	2.91	英語—必須	2.90		
世界—使う	2.91	人—とる	2.90		
必要—思う	2.65	必須—思う	2.90		

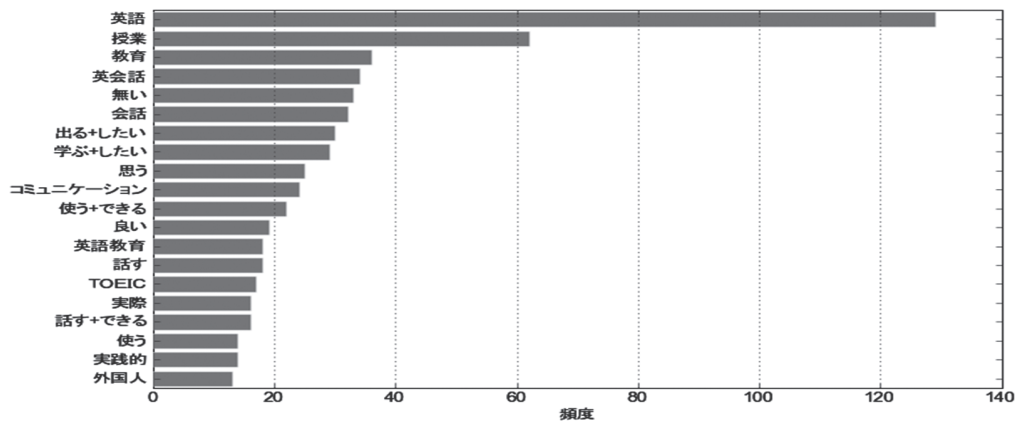


図3 「受講したい英語の授業」の単語頻度

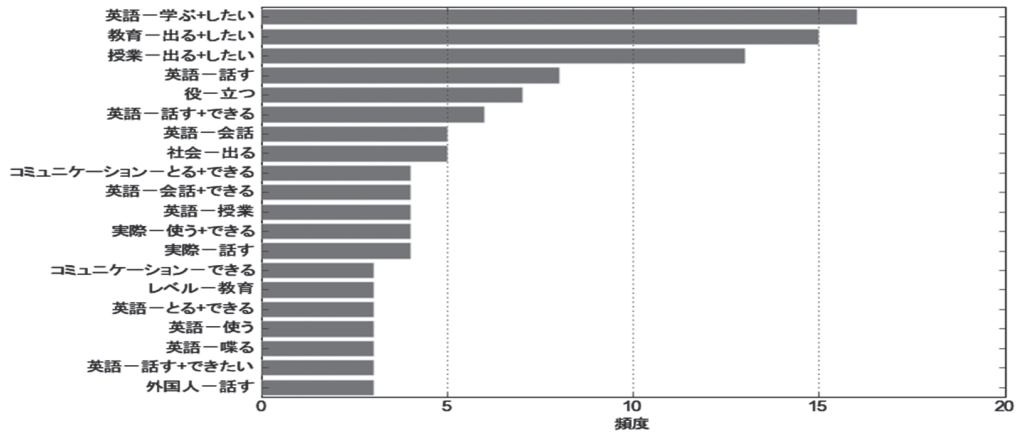


図4 「受講したい英語の授業」の係り受け頻度

表5 各グループの「受講したい英語の授業」の単語頻度

TOEIC 低	頻度	TOEIC 中	頻度	TOEIC 高	頻度
英語	53	英語	51	英語	25
授業	21	授業	25	授業	16
無い	16	英会話	18	会話	9
教育	12	教育	17	TOEIC	8
英会話	11	学ぶ+したい	15	教育	7
思う	11	受ける+したい	14	学ぶ+したい	6
受ける+したい	11	無い	14	使う+できる	6
会話	10	会話	13	英会話	5
コミュニケーション	9	コミュニケーション	11	点数	5
良い	9	英語教育	11	コミュニケーション	4
学ぶ+したい	8	思う	11	できる	4
使う+できる	8	楽しい	9	受ける+したい	4
話す	8	実際	9	身	4
話す+できる	8	良い	9	話す	4
英語教育	7	使う+できる	8	外国人	3
実用的	7	使う	7	学ぶ	3
外国人	6	実践的	6	使う	3
実践的	6	文法	6	思う	3
立つ	6	話す	6	実際	3
わかる+ない	5	話す+できる	6	社会	3

の授業の特徴語および特徴表現である。

「TOEIC 下グループ」では、単語頻度（表5を参照）および特徴語（表7を参照）において「無い」が上位に来ていることから、受けたい授業があまりないと思っている学生が多いことがわかる。また、単語頻度（表5を参照）および特徴語（表7を参照）においては「実用的」の語彙が上位に来ており、「TOEIC 下グループ」は実用的な授業を受講したいと思っていることがわかる。また、係り受け頻度（表6を参照）および特徴表現（表8を参照）においては「英語—話す+できる」「英語—話す+できたい」が上位に来ており、これらのことから「TOEIC 下グループ」においては英語を話す授業を受けたいと望んでいる学生が多いといえるであろう。

「TOEIC 中グループ」では単語頻度（表5を参照）、係り受け頻度（表6を参照）、特徴語（表7を参照）、および特徴表現（表8を参照）より英会話など実際に話す楽しい授業を受けたいと思っている学生が多いことがわかる。

一方、「TOEIC 上グループ」では単語頻度（表5を参照）、特徴語（表7を参照）、および特徴表現（表8を参照）より TOEIC に興味があり、英語を話す会話の授業を受けたいと

表6 各グループの「受講したい英語の授業」の係り受け頻度

TOEIC 低	頻度	TOEIC 中	頻度	TOEIC 高	頻度
授業—受ける+したい	6	教育—受ける+したい	10	英語—話す	4
英語—学ぶ+したい	5	英語—学ぶ+したい	8	英語—学ぶ+したい	3
教育—受ける+したい	4	実際—話す	3	授業—受ける+したい	3
英語—話す+できる	3	社会—出る	3	英語—会話	2
役—立つ	3	授業—受ける+したい	3	英語—授業	2
コミュニケーション—とる+できる	2	役—立つ	3	英語—喋る	2
英語—とる+できる	2	コミュニケーション—できる	2	会話—授業	2
英語—会話	2	コミュニケーション—とる+できる	2	実際—使う+できる	2
英語—会話+できる	2	レベル—教育	2		
英語—話す	2	英会話—入れる+してほしい	2		
英語—話す+できたい	2	英語—話す	2		
日本語—使う+ない	2	英語—話す+できる	2		
		外国人—話す	2		
		学力—向上	2		
		向上—英語教育	2		

思っている傾向があることがわかる。

以上のことから RQ2「社会科学系の大学生の受講したい英語の授業はどのようなものであろうか。さらにそれらは英語の熟達度別によりどのように異なるであろうか」を検討していくと、本研究に参加した社会科学系の大学生は概して社会に出たときに役立つ英会話などコミュニケーション能力を高める授業を受けたいと思っているといえるであろう。さらに、英語の熟達度別に比べてみると、どのグループも英語を話す授業を望んでおり、「TOEIC 上グループ」になると TOEIC に関係する授業を希望する学生が多くなる傾向があることがわかる。

4.3 英語学習の仕方

次に本研究に参加した学生が現在どのような英語学習を行っているかを調べた。図5の「学習の仕方」の単語頻度解析と図6の「学習の仕方」の係り受け頻度解析の結果より、本研究に参加した学生は「する+ない」という単語が最も多いことから英語を学習していない学生が多いことがわかる。その他、「単語—覚える」「洋楽—聞く」「授業—出る」という学習を主に行っていることがわかる。

次に「学習の仕方」に関して英語の熟達度別に調べてみた。単語頻度（表9を参照）、係り受け頻度（表10を参照）、特徴語（表11を参照）、および特徴表現（表12を参照）から「TOEIC 下グループ」は英語を学習していない学生が多く、その他英語の本を読んだり、

社会科学系の大学生を対象にした英語学習に対する意識調査

表7 各グループの「受講したい英語の授業」の特徴語

TOEIC 低	指標値	TOEIC 中	指標値	TOEIC 高	指標値
英語	9.86	楽しい	6.19	授業	14.35
無い	7.57	英語教育	5.64	TOEIC	13.53
実用的	5.97	英会話	5.07	点数	9.65
普通	4.40	学ぶ+したい	3.61	会話	9.38
話す+できる	4.17	希望+ない	3.46	英語	7.83
良い	3.92	力	3.46	使う+できる	5.95
立つ	3.90	実際	3.45	できる	5.63
わかる+しやすい	3.88	パソコン	3.28	学ぶ	4.79
リスニング	3.88	高校	3.28	身	4.72
英文	3.88	書く	3.28	できる+したい	4.40
思う+できる	3.88	満足	3.28	ビジネス	4.40
受ける+したくない	3.88			文法+ない	4.40
思う	3.42			知識	3.95
わかる+ない	3.38			社会	3.88
外国	3.38			喋る	3.50
機会	3.38			つける	3.04
勉強+したい	3.38			能力	3.04
ある+ない	3.11			学ぶ+したい	2.77
日本語	3.11			スピーキング	2.59
学ぶ	2.86			先生	2.59
役立つ	2.86				

表8 各グループの「受講したい英語の授業」の特徴表現

TOEIC 低	指標値	TOEIC 中	指標値	TOEIC 高	指標値
授業—受ける+したい	4.11	教育—受ける+したい	5.55	英語—話す	6.66
日本語—使う+ない	2.80			会話—授業	4.27
				英語—喋る	3.80
				英語—授業	3.33
				実際—使う+できる	3.33
				英語—会話	2.86

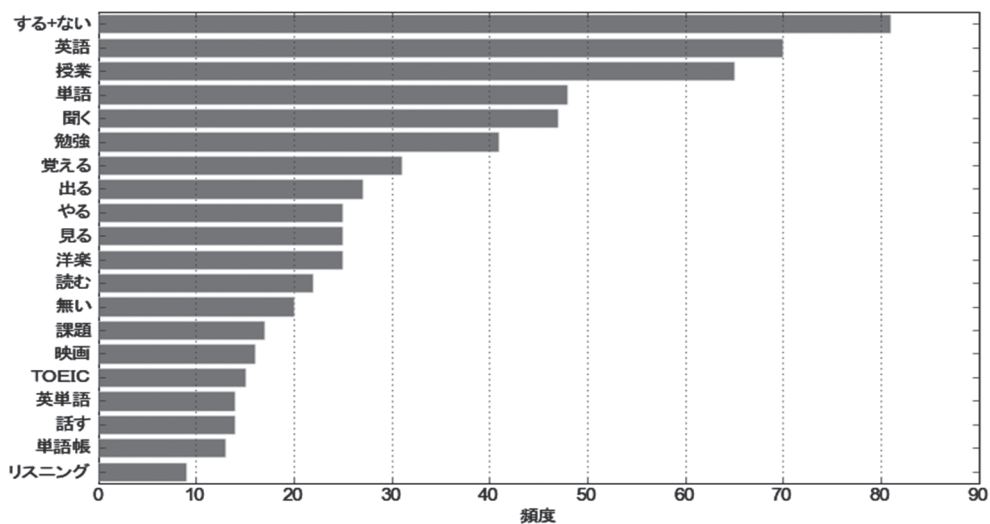


図5 「学習の仕方」の単語頻度解析

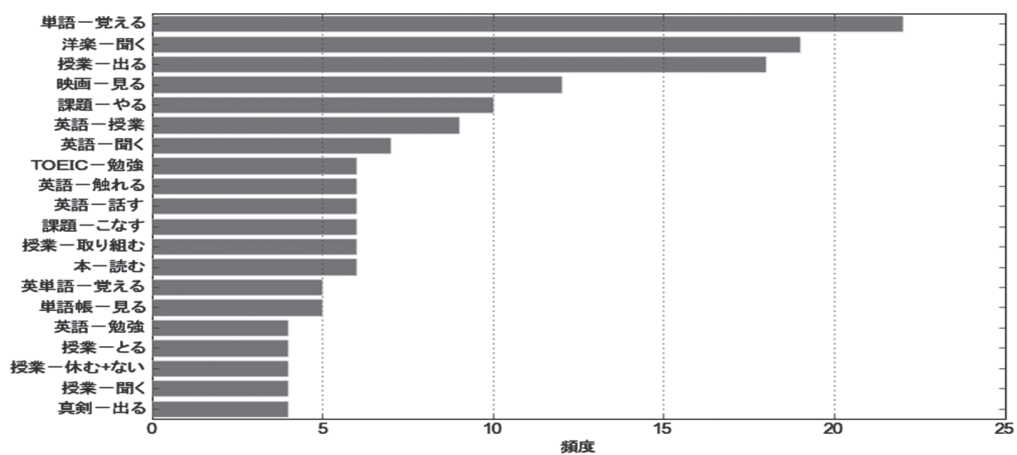


図6 「学習の仕方」の係り受け頻度解析

表9 各グループの「学習の仕方」の単語頻度

TOEIC 低	頻度	TOEIC 中	頻度	TOEIC 高	頻度
する+ない	42	する+ない	31	英語	13
英語	29	英語	28	授業	11
授業	27	授業	27	勉強	11
単語	19	聞く	22	する+ない	8
聞く	18	単語	21	単語	8
勉強	17	やる	17	聞く	7
読む	13	覚える	16	TOEIC	6
覚える	11	見る	13	洋楽	6
洋楽	9	勉強	13	話す	6
見る	8	課題	10	受ける	5
出る	8	洋楽	10	無い	5
やる	7	無い	9	覚える	4
課題	7	映画	8	見る	4
TOEIC	6	単語帳	8	映画	3
リスニング	6	読む	8	音読	3
英単語	6	わかる+ない	6	思う	3
取り組む	6	英単語	6	できる	2
無い	6	受ける	6	とる	2
映画	5	出る	6	英単語	2
本	5	積極的	6	機会	2

英単語を覚えることなどを行っている学生が多いといえるであろう。また、「TOEIC 中グループ」の学生は単語を覚えたり、課題を行うこと、さらに音楽を聴くことなどにより英語を学習しており、「TOEIC 上グループ」においては TOEIC に関する学習をしたり、英語を話す練習を行っている学生が多いのがわかる。

以上のことをもとに RQ3「社会科学系の大学生は英語をどのように学習しているのだろうか。さらにそれらは英語の熟達度別によりどのように異なるであろうか」を検討していくと、本研究に参加した社会科学系の大学生は概して単語を覚えたり、洋楽を聞いたり、授業に出ることにより英語を学習しているといえるであろう。さらに、「TOEIC 下グループ」と「TOEIC 中グループ」の学生は英語の本を読むこと、英単語を覚えること、課題を行うこと、さらに音楽を聴くことなどにより英語を学習しているが、「TOEIC 上グループ」になると TOEIC に関する学習や英語を話す練習を行っており、自らが学びたい英語と一致していることが明らかになった。

表10 各グループの「学習の仕方」の係り受け頻度

TOEIC 低	頻度	TOEIC 中	頻度	TOEIC 高	頻度
授業—出る	7	単語—覚える	12	英語—授業	4
洋楽—聞く	7	洋楽—聞く	8	単語—覚える	4
単語—覚える	6	課題—やる	6	洋楽—聞く	4
本—読む	5	映画—見る	5	TOEIC—勉強	3
映画—見る	4	授業—受ける	5	映画—見る	3
英単語—覚える	4	英語—授業	4	英語—話す	3
課題—やる	4	課題—こなす	4	英語—触れる	2
TOEIC—勉強	3	英語—聞く	3	授業—とる	2
英語—触れる	3	音楽—聞く	3	授業—受ける	2
英語—聞く	3	授業—取り組む	3		
授業—取り組む	3	授業—出る	3		
授業—出席	3	単語帳—見る	3		
授業—聞く	3	e-Learning—やる	2		
英語—ふれる	2	英語—復習	2		
英語—勉強	2	英語—話す	2		
課題—こなす	2	字幕—見る	2		
真面目—取り組む	2	授業—休む+ない	2		
単語—意味	2	授業中—話す	2		
単語—勉強	2	真剣—受ける	2		
単語帳—見る	2	単語—調べる	2		

5. おわりに

本研究ではテキストマイニングの手法を取り入れて、社会科学系の大学生の英語学習に対する動機づけやニーズ、さらに、英語学習の仕方について調査を行った結果、本研究に参加した学生は社会がグローバル化する中、英語の必要性を感じているから英語を学習したいと思っており、また、社会に出たときに役立つ、特に、英語のコミュニケーション能力を高める授業を受けたいと思っている学生が多いことが明らかになった。さらに、英語の熟達度が低いグループでは漠然と必要であると思うから英語を学習する傾向がみられたが、熟達度が高くなるにつれて就職ということ意識して英語を学習するようになることも明らかになった。

なお、本研究ではグローバル化を意識して英語を学習している学生が多かったことを明らかにしているが、これは社会科学系の大学生を対象に調査を行ったためなのか、それとも学部には関係なく日本の学生の全体的な特徴であるのかなどを明らかにするために保育、体育、

表 11 各グループの「学習の仕方」の特徴語

TOEIC 低	指標値	TOEIC 中	指標値	TOEIC 高	指標値
する＋ない	22.04	やる	12.11	勉強	10.16
読む	9.26	課題	5.09	話す	9.38
本	5.51	積極的	5.00	TOEIC	8.92
出る	5.33	覚える	4.78	受ける	7.21
リスニング	5.19	単語帳	4.60	思う	5.61
取り組む	5.19	音楽	4.52	音読	4.69
英語	4.06	わかる＋ない	4.12	通う	4.35
授業	3.92	文法	4.12	洋楽	4.33
e-Learning	3.78	見る	4.05	無い	3.99
発音	3.78	調べる	3.87	持つ	3.89
きく	2.99	復習	2.99	できる	3.43
出席	2.99	こなす	2.75	練習	3.43
洋画	2.67	聞く	2.70	とる	2.97
なれる	2.52	学習	2.50	触れる	2.52
ふれる	2.52	字幕	2.50		
やる＋ない	2.52				
英プレ	2.52				
学ぶ	2.52				
参考書	2.52				
程度	2.52				
勉強＋ない	2.52				

表 12 各グループの「学習の仕方」の特徴表現

TOEIC 低	指標値	TOEIC 中	指標値	TOEIC 高	指標値
授業—出る	6.88	単語—覚える	4.78	英語—授業	5.70
本—読む	5.78	音楽—聞く	3.40	TOEIC—勉強	4.64
英単語—覚える	4.48	課題—やる	3.27	英語—話す	4.64
授業—出席	3.93	授業—受ける	3.02	授業—とる	3.09
授業—聞く	3.17	課題—こなす	2.77		
英語—ふれる	2.62				
真面目—取り組む	2.62				
単語—意味	2.62				

医療系など他学部においても調査を行っていく必要があるであろう。

引用文献

- カレイラ松崎順子 (2009) 「保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する調査—English for Specific Purposes (ESP) の視点から—」『JALT Journal』31, 65-86.
- 長加奈子 (2009) 「英語学習活動に影響を与える要因について——インタビュー調査から見えてくるもの」『基盤教育センター紀要』3, 1-19.
- 早坂慶子 (1995) 「北海道における大学英語教育のニーズ分析—北星学園大学の場合—」, 『北星学園大学文学部北星論集』32, 67-91, 204-205.
- Kikuchi, K. (2005). Student and teacher perceptions of learning needs: A cross analysis, *Shiken JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter*, 9, 8-20.
- 甲田直喜 (2011) 「リメディアル教育における文法項目の誤答調査と到達度目標」『淑徳短期大学研究紀要』50, p. 225-240.
- 中野秀子 (2005) 「ニーズ分析と教材開発」『ESPの研究と実践』4, 51-60.
- 清水裕子・松原豊彦 (2007) 「経済学部卒業生の英語使用に関するニーズ分析」『立命館経済学』56, 169-181.
- 田中博晃 (2009) 「3つのレベルの内発的動機づけを高める：動機づけを高める方略の効果検証」『JALT Journal』31, 227-250.
- 田中博晃・廣森友人 (2007) 「英語学習者の内発的動機づけを高める教育実践的介入とその効果の検証」, 『JALT Journal』29, 59-80.
- 吉重美紀 (2005) 「大学の共通教育に学生が求める英語力—工学部, 水産学部, 医学部1, 2年生のニーズ分析から」『ESPの研究と実践』4, 111-121.